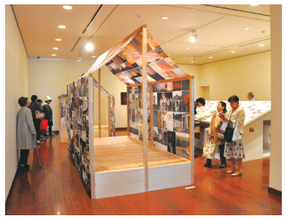
みんなの家の展覧会
11/17〜1/8

くまもとアートポリス みんなの家 の 展覧会

被災地の現状を国内外に発信するため、仮設住宅の入居者や県内の高校生が撮影した写真を展示する『くまもとアートポリス　みんなの家 の 展覧会』を熊本市現代美術館で開催した。
展示した写真は、プロカメラマン・中村こども氏が講師を務める「カメラ講座」に参加した、8歳から73歳までの入居者ら計14名が「日常の生活」を撮影し、被災地の現状を語ったインタビュー映像も上映した。
会期中には約5000人が来場し、多くの方に被災地の現状や、かけがえのない「日常の生活」の大切さを伝えた展覧会となった。



「みんなの家」をモチーフとした楽しい写真展

1万枚以上の写真の中から、約650枚を布に印刷し、大小5つ配置した展示物に壁や天井に見立てて展示した。この展示物は、県産の木材や畳を使用して製作され、中に入ってゆっくりと写真を鑑賞することができる。
仮設住宅に暮らす方々の笑顔や、なにげない日常の1コマが集まる、素敵な写真展となった。

写真展示が来場者と撮影者をつなぐきっかけに

撮影者がそれぞれ気に入った写真を一枚ずつ選び、作品パネルとして展示した。仮設住宅の玄関先で野菜を選別する入居者の姿や、断層が見える畑で農作業をする風景などがあり、来場者と撮影者が話をするシーンもあった。

被災者自身が心境を語るインタビュー映像

写真を撮影した仮設住宅の入居者に、地震発災時の様子や今の暮らし、写真を撮影した感想などをインタビューし、約15分の映像で紹介した。
多くの来場者が、被災者自身の言葉で“被災地の今”を伝える映像に足を止めてご覧いただいた。

参加型展示物 〜ダンボールで作った「みんなの家」〜

「みんなの家」をモチーフに制作した「参加型の展示物」を設置した。県内外の来場者らが持ち寄った写真を展示物の屋根や壁に貼り、日常の生活の大切さを伝える作品としてつくりあげた。
会期中、東日本大震災で被災した福島県新地町からも写真が届き、400枚以上の写真が敷き詰められた。

この「みんなの家」は中に入って楽しめるようにもなっている

みんなの家の展覧会 オープニングイベント
12/2

展覧会セレモニー・ペチャクチャイベント in 熊本
〜熊本のいま、そして〜

展覧会のオープニングイベントとして、被災地の現状を発信するイベントを熊本市現代美術館で開催した。
展覧会を企画したアストリッド・クライン氏は展覧会に込めた思いや被災地へのエールを送った。
セレモニーでは、「熊本のいま、そして」と題し、本展の写真を撮影した仮設住宅の入居者らを招き、写真撮影の感想や被災地での今の暮らしを伝えた。
ペチャクチャイベントでは、仮設住宅の入居者や東海大学の学生など熊本地震の復興支援に関わるプレゼンター6名が、20枚のスライドを使って紹介した。約70名が来場し、被災者自身の言葉で語られた「被災地の現状や日常の暮らし」を伝えるイベントとなった。

展覧会セレモニーの様子

ペチャクチャイベントの様子

Interview

展覧会の開催にあたって

アストリッド・クライン氏

「みんなの家」があるように、「みんなの写真展」があったら素敵だと思ったのがこの展覧会を企画したきっかけ。「みんなの家」が、現地でどのように使われているのか知りたくて、それを皆さんにも伝えたかった。写真や会場の展示物を見て、私自身がとても感動している。熊本は私の想い出がいっぱいある大切な場所で、それらを結んでいるのが「みんなの家」。熊本の人たちはスゴイ!これほど永く継続して建築デザインを取り入れている県は他にはないと思う。私にとって熊本は“Special”な場所。これまでも、ずっとこれからも。

VOICE　プレゼンター **森本ひとみ**さん 展覧会撮影者

森本さんは、前震発生時刻「21時26分」で止まったままの時計などを紹介し、「益城町は元の姿に戻らないが、一歩一歩新しく生まれ変わろうとしています。その記録を写真に残していきたい」と被災地の様子を記録する意義を伝えた。

みんなの家の展覧会
企画イベント
12/16

くまもとアートポリス建築展2017

こども建築塾

こんな「みんなの家」があったらいいな

集まって楽しい「みんなの家」が大集合 小学生の自由な発想がいっぱい

展覧会の企画を手掛けた建築家のアストリッド・クラインさんを講師に迎え、熊本市現代美術館で「こども建築塾」を開催しました。小学4年生から6年生19名が参加して、甲佐町の災害公営住宅の計画地をイメージし、どんな「みんなの家」があったらいいかを考えて模型をつくりました。まず、クラインさんから「人が集まるだけではなく、みんなが楽しめる場所にしてほしいな。みんなでご飯を食べるのかな、歌を歌うのかな。「みんなの家」の使い方をイメージしてみましょう。形や色にもこだわって楽しい計画を考えてみよう」と子供たちにアドバイスを送りました。

アストリッド・クラインさん

手描きの設計図を持ち寄り まずはプレゼンテーション

子供たちは5グループに分かれ、考えてきた設計プランを発表。「家の中から空が見えるように天井に窓を付けます」「寂しくないように、全面ガラス張りにして外からも中が見えるようにします」など、子供ならではの自由な発想が次々と飛び交い、多彩な色使いとユニークなデザインが発表されました。

時間を忘れて模型づくりに熱中 つくりながら新たなアイデアも！

いよいよ模型づくりが始まりました。子供たちは、厚紙やボード、紙粘土、カラーマジックなど、用意されたさまざまな材料を使って、模型づくりに取り組みました。クラインさんは、「好きな色をいっぱい使って、白い場所が一つもないくらいカラフルな「みんなの家」にしましょう。模型の中には、自分たちの姿も入れてね。」とアドバイス。県内の建築を学ぶ大学生のサポートを受けながら、子供たちは約3時間模型づくりに没頭し、無事完成させました。

完成した作品を発表！ アストリッド賞も決定！

完成した模型と「みんなの家」の設計図を使って、公開発表会を開催しました。子供たちは作品のポイントや、どのように過ごしてほしいかといったストーリーも盛り込んで計画を発表しました。星空が見える部屋やすべり台・アスレチックがあるなど夢のある「みんなの家」が集合です。高齢者の方に配慮してスロープを付けるなどバリアフリーに配慮した作品も。最後にクラインさんが特に優秀だった作品を選定し、賞状と記念品をプレゼントしました。参加した子供たちからは「復興に向けて、みんなでがんばっていきたい」「建築の楽しさを学ぶことができた」と感想がありました。

アストリッド賞・最優秀賞
山本小桃子さん
丸い形でやさしいイメージの「みんなの家」です

アストリッド賞・優秀賞
鈴木郷子さん
すべり台やはしごをつけた楽しい「みんなの家」です

くまもとアートポリス建築展2017

仮設団地リポートツアー

開催日 11/26

熊本地震からの復旧・復興や防災等に関心のある方々が、リポーターとして仮設団地を訪問するバスツアーを開催した。仮設団地にお住まいの方々と座談会を開き、地震発生からこれまでの経験をお話しいただくなど意見交換を行った。また、被災地の復旧・復興状況を視察し、参加者にはツアーを通じて感じた「熊本のいま」を、レポートしてもらった。

甲佐・美里コース

参加者数：28名

上益城郡の復旧・復興状況視察 ➡ 座談会1「白旗仮設団地（甲佐町）」 ➡ 座談会2「くすのき平仮設団地（美里町）」 ➡ 佐俣の湯（物産、公衆浴場）

南阿蘇コース

参加者数：30名

座談会1「南出口仮設団地（大津町）」 ➡ 座談会2「下野山田仮設団地（南阿蘇村）」 ➡ 南阿蘇村の復旧・復興状況視察 ➡ あそ望の郷くぎの（物産館）

入居者の声

- あの日、何が起きたのか最初は理解できなかった。
- 地震がなければ会うことはなかった人たちと出会えたことは、自分にとってひとつの財産になった。
- 新聞や報道が取り上げるのは被害が大きかったところ。私達が住む地域の取り上げ方とは全然違っていた。
- 地域のコミュニティがとても重要だと思った。住民同士のつながりが強くなったと思う。
- 年配者が孤立しないように皆で声掛けをし合って互いに助け合っている。
- 日常で定期的に訓練を行い非常時に備えることが大事。

Report リポーターの皆さんから寄せられた感想・ご意見等

- 外部の人間が被災地を訪ねてボランティア活動をするのは、被災された方にとって迷惑だと思っていたが、このツアーが自分の耳で話を聞く良い機会だと思い参加した。
- 「仮設」というと、これまでは無機質な空間のイメージだったが、実際には温かみのある空間が広がっていた。
- 被災した建物は解体され、空き地のままとなっているのが印象的だった。解体が終わっても次へ進めていない状況に見えた。
- 「みんなの家」は、木の温かさが感じられる内装がとても印象的で和む空間だと思った。入居者の方々もこの家を慕い、日々助け合って交流を楽しんでいる風景が伝わってきた。
- 被災された方が一刻も早く安心できる生活に戻ってほしいが、それまでの仮の住まいが、安心・安全・健康的な暮らしを送ることができ、再建へ向けて前向きに動き出せるものになるよう試行錯誤することも大切だと思う。
- 入居者の皆さんの話を聞いて、「復興」は原状回復ではないのだと気付いた。仮設を出ても、以前と全く同じ生活は戻らないが、それぞれが最良と思える次の一手を打ち続けることが復興するということだと思う。今回のツアーで得た教訓「家具は固定して！人間はフレキシブルに」を、災害の備えと指針にしようと思う。

完成プロジェクト

大腸肛門病センター高野病院

アートポリスの新テーマ「自然に開き、人と和す」のもとプロポーザルにより選ばれたKAP初の病院建築

大腸肛門病センター高野病院は、平成25年に開催した公募型プロポーザルで最優秀賞を受賞した『共同建築設計事務所＋コンテンポラリーズ』が設計を担当し、平成27年10月に着工、平成29年7月に竣工した。
移転改築となる新病院は、大腸肛門病の急性期・専門病院としての機能を更に発展させ、将来にわたって地域医療に貢献する病院づくりを目指した。
「質の高い医療環境とともに、人と人、地域と人を繋ぐ役割を意識した」と設計者の川島氏と柳澤氏。自然を受け入れ、人々との交流を促す地域に開かれた公共性の高い“ひろば”のような病院が完成した。

PHOTO／株式会社川澄・小林研二写真事務所

- ●構造・階数　鉄骨造（免震構造）・地上6階
- ●延べ面積　14,966.34㎡（病院棟部分）
- ●設計者　共同建築設計事務所＋コンテンポラリーズ
- ●施工者　松尾・岩永特定建設工事共同企業体
- ●建築主　社会医療法人社団高野会
- ●竣工　平成29年7月

高野病院　総務部　事務次長
高森 公正さん

開院から35年後の移転新築でした。入院患者さんが新病院に移って来られた際には玄関でお迎えし涙が出ました。病院の引越しという大プロジェクトに当事者として立ち会えたことが嬉しく、設計者、施工者、そしてKAPの皆様のご支援とご協力によりすばらしい病院が出来たことに感謝致します。今後もKAPのテーマである「自然に開き、人と和す」に沿い親しまれる病院でありたいと思います。

共同建築設計事務所
川島 浩孝氏

コンテンポラリーズ
（関東学院大学准教授）
柳澤 潤氏

参加者コメント

- ●コンセプトである開かれた“ひろば”のような病院づくりが体感できて、病院建築のイメージが変わった。
- ●特徴的な外観や病室の形は単なるデザインによるものだと思っていたが、患者一人一人の環境を考え抜いたものだと説明があり納得した。
- ●患者を中心に考えられたプランが素晴らしかった。ガーデンと呼ばれる緑化は職員の方々もリフレッシュできる効果があると思う。
- ●アートポリス初の病院建築ということでＫＡＰの見学会に初めて参加した。施設内は病院とは思えないほど落ち着いた雰囲気だった。

完成見学会

8月1日のリニューアルオープンを前に、新病院の特徴である個室的多床室や屋上緑化などを見学する機会として完成見学会を7月16日に開催した。
見学会には建築関係者など約120人が参加し、設計者の川島氏と柳澤氏の説明を受けながら、完成した建物を見学した。
見学会では、設計者から設計コンセプトや施設概要の説明があり、医療施設として効率的な計画である点などが紹介された。その後、参加者は設計者と一緒に施設内を巡り、病棟や一階外来、オペ室、また免震装置なども見学した。
病棟の多床室は、各ベッドが固有の窓を持つ「個室的多床室」を採用し、全ての患者が外を眺め、患者自身で病室の環境を調整できる。また、建物各所にはガーデンとよぶ屋上緑化を設け、患者や職員だけでなく地域住民にも開かれた計画が特徴。参加者は、設計者の説明に耳を傾け、光や風を感じる病室やガーデンからの眺望を興味深く見学した。

完成見学会で説明をする川島氏（左）と柳澤氏（右）

完成プロジェクト

熊本県総合防災航空センター

九州を支える広域防災拠点～県産木材の活用に挑んだヘリコプター格納庫～

大空間の構成や耐震性が要求される防災ヘリや警察航空隊のヘリ格納庫において、九州における災害時の拠点として活用されるだけでなく、県産木材の利用拡大を先導する建物となることが期待される。
平成27年8月に開催した設計者選定プロポーザルで最優秀賞を受賞した『小川次郎＋アトリエ・シムサ』と、県内共同事務所に選定されたライト設計が共同体となり設計を担当し、平成28年10月に着工、平成29年10月に竣工した。
実施設計の図面がほぼまとまった着工目前の段階で熊本地震が起きた。建設が始まっても、木材の入手が困難になるなどの課題は生じたが、施工者などの懸命な努力と「震災があったからこそ、一刻も早く実現する」という関係者の強い意志により完成を迎えることができた。

PHOTO／日本工業大学小川研究室

- ●構造・階数　木造一部鉄筋コンクリート造・地上1階
- ●延べ面積　1,909.55㎡
- ●設計者　小川次郎／アトリエ・シムサ＋ライト設計
- ●施工者　建築／岩下・熊野建設工事共同企業体
  電気／宮本電気工事株式会社
  機械／株式会社ミナミ冷設
- ●建築主　熊本県、熊本県警察本部
- ●竣工　平成29年10月

アトリエ・シムサ
藍場 弘充氏
（現場監理を担当）

一見無機質な印象を与える外観ですが、室内側に折れ込んだサッシと外壁や、杉目調のエンボス加工された外壁材により、大小様々な影が生み出される設計としています。そのような豊かな表情によって、この施設が皆さんに認識していただけると幸いです。

ライト設計
松村 一幸氏
（同左）

施設側から要求されるデザインと機能を実現するため、小川先生と共に、施設側と幾度となく協議を重ね、共同企業体として設計・監理業務に専念しました。熊本地震の発生により施設の重要性を肌で感じ、我々が関われた意義を思うと感慨深いものがあります。

アトリエ・シムサ
（日本工業大学教授）
小川 次郎氏

参加者コメント

現場見学会

- ●県の木材に対する取組みがそのまま表現された建物だと感じた（建築士事務所勤務）。
- ●細かい納まりなどの説明や構造担当者からの説明が今後の業務の参考になった（建築士事務所勤務）。

完成見学会

- ●こんなに大きい木造の空間は初めて。木材の組み方が美しく、自分でもこんな設計ができたらいいなと思う（建設会社勤務）。
- ●大規模木造建築でありながら一般流通材や在来の金物を使って建築されているという点が参考になった。今後の実務に活かせるヒントになった（建築士事務所勤務）。

現場見学会・完成見学会

建築に携わる人材育成を目的に大規模な木造建築を学ぶ機会とするとともに、防災施設の内容を広く皆さんに知っていただくため、平成29年8月2日に現場見学会、同年11月5日に完成見学会を開催した。
現場見学会では、最大の見所となる屋根部分の木架構工事を、約50名の参加者が猛暑の中、熱心に見学された。
完成見学会には約100名の方が参加され、設計者や構造担当者の話に熱心に耳を傾け、大規模な木架構に圧倒されたという声をいただくなど、充実した見学会となった。
参加者からは木造と鉄筋コンクリート造の混構造についてなど積極的な質問も多く寄せられ、熊本のみならず、九州における災害時の拠点として活用されるだけでなく、県産木材の利用拡大を先導する建物として大きな期待が寄せられている。

現場見学会

完成見学会